

## 資料紹介 『駿府風土記』の「富士山禅定図」

はじめに — 『駿府風土記』と先行研究について—

『駿府風土記』\*<sup>1</sup>（当館請求記号：Q291/19）は、駿府近郊の名所旧跡、名産品、年中行事、駿府城内に関する詳細な記述と駿府町割略図などの手彩色された絵図が掲載された久能文庫所蔵の地誌である。「干時天保七申年 林鐘上旬写之」の奥書から、天保7年6月上旬の写本とわかる。旧蔵者関口隆正氏の安永年間成立を推定する明治20年の朱書識語がある。さらに足立鍛太郎氏の大正14年の考察が巻末に貼付され、『駿国雑誌』に合致する図があり、「駿府明細記に出る御殿の図」とあることから『駿府明細記』と呼ばれた書物かと推測している。先行研究では、若尾俊平氏が、1980年に内閣文庫『駿府明細記』の序文を紹介し、宝暦8年9月25日に江戸を発ち、翌春まで駿府に滞在した幕士が筆者であると推定した\*<sup>2</sup>。さらに、1983年には、関連する写本を検討し、『駿府風土記』と『駿府明細記』の差異を、書名の違い、序文の有無、『駿府風土記』に諸歌集からの抜書が「追加」として加えられた点を指摘し、諸写本の系譜を整理した\*<sup>3</sup>。本論考では、先行研究では言及されていない富士山絵図について『駿府風土記』（以下『風土記』）と内閣本『駿府明細記』\*<sup>4</sup>（以下『明細記』）を比較するとともに、制作時に参考にしたと考えられる村山三坊が版行に係わった「富士山禅定図」について検討したい。



図版1 『駿府風土記』の富士山絵図

### 『風土記』の富士山絵図について

手彩色された富士山絵図は、二十七丁表に掲載されている（図版1）。駿河湾から山頂に至る南麓の景観を大宮・村山口登拝道を中心に描き、すやり霞を効果的に用いた重文『富士山曼荼羅図』\*<sup>5</sup>と異なり、信仰施設を列挙している。右肩には「表惣本寺京聖護院宮門跡／村山興法寺富士山別当三ヶ坊有／諸堂社天下御建立所」とある。道は鬱金色、湖沼・河川・海は藍色、山は麓から頂上へ色が濃くなる緑色、大型建築物は屋根が赤金色・壁面は赤みのある茶色、空や雲は薄い藍色で彩色されている。地名等は朱点打ちの墨書が57箇所、墨書のみが17箇所、朱点のみが3箇所ある（第1表）。画題はないが、謄写版刷翻刻が「富士詣案内図」と記し、現在も書誌情報に使用されている。本文五丁裏に「富士山 駿甲信三ヶ國ニナダレタリ駿河の富士と云来ル此國ヲ元トスルヤ」とあるが、絵図についての言及はない。

### 『明細記』と『風土記』の富士山絵図の比較

『明細記』では墨書、藁色、薄藍色、朱と彩色は少ない。地名等は朱点打ちの墨書が24箇所、墨書のみが49箇所ある（第1表）。画題はないが、四十丁裏に「右富士山禅定図」以下11行が記されている。「是者府中ヲ離れ別事タリト云ヘトモ富士ハ駿河ヲ名トス依之之後加之」とあり、かつては絵図の後にこの記述が続く、画題は「富士山禅定図」と断定している。続く10行には、孝安帝九十二年富士湧出説、富士山異名、郡名を山名とした富士山記の引用、宝永噴火の被害、頂上八葉九尊を列記している。地名等を比較すると、『風土記』にあり『明細記』にない箇所は12箇所、山中の「岩屋フトウ」「中宮」、富士郡の「浅間」「今山今宮」「六所宮」などの信仰施設が重要である。岩屋不動と中宮は富士峯修行所\*<sup>6</sup>であり、富士郡では大宮浅間と下方五社が加えられた。『明細記』にあり『風土記』にない箇所は6箇所、山中の「竜カバ」」「矢立」「牛ノ王子」には朱点のみあり、脱漏と考えられる。『明細記』を『風土記』が修正している箇所は5箇所

所で、「山宮辻坊」を「山宮」「辻坊」に分けたのは重要な修正である。「山宮」は遥拝所と参籠所からなる山宮浅間社<sup>\*7</sup>であり、大宮浅間社の社記では浅間大神を祀る故地とされている。辻之坊は、村山三坊の一坊で、七社浅間社を管理した。「山宮辻坊」は他の史料にもなく、『明細記』の原著者の誤記と考えられる。

第1表 『駿府風土記』・『駿府明細記』・「富士山名所記」（村山三坊版行の富士山禅定図のひとつ）の比較

	『駿府風土記』	内閣本『駿府明細記』	岩瀬本『駿府明細記』	「富士山名所記」
地名等の文字	77箇所	73箇所	70箇所	105箇所
登拝道施設	11地点(朱点3点除)	11地点	11地点	16地点
富士下方施設	23地点	19地点	19地点	32地点
富士下方五社	五社	三社	三社	五社(漢数字表記有)
日蓮宗富士五山	無	無	無	有
「表惣本寺…」	有(山体右肩)	有(山体右肩)	無	有(村山東)
序	無	有	有	—
追加	有	無	無	—
富士山略縁起	無	有(巻末)	有(巻末)	有(山体上方)
宝永噴火の記事	無	有(巻末の縁起混入)	有(巻末の縁起混入)	有(宝永火口右)

\* 岩瀬本は西尾市岩瀬文庫所蔵『駿府明細記』。歴史文化情報センター所蔵の電子複製本による確認。

### 村山三坊が版行に係わった富士山禅定図について

『明細記』『風土記』の富士山絵図は二次史料であり、ともに村山三坊が版行に係わった「富士山禅定図」<sup>\*8</sup>（以下「禅定図」）を一次史料として作成したものと考えられる。村山三坊<sup>\*9</sup>とは、富士宮市村山にあった大鏡坊・池西坊・辻之坊の修験三坊であり、月番で村政を担当した。近世には本山派聖護院宮御直末院として村山興法寺別当を務め、登拝期には宿坊として道者を止宿させた。三坊が版行に係わった「禅定図」とは、「富士山名所記」「三国第一富士山禅定図」「富士山表口真面之図」などの題名で販売された木版刷絵図の総称である。絵図には宝暦8年(1758)に建立された「富士山道」の道標<sup>\*10</sup>が描かれ、『東街便覧図略』<sup>\*11</sup>には、天明6年(1786)に元吉原で「富士山禅定図并富士山略縁起」を販売した記録があることから18世紀後半の東海道筋での販売を確認できる(第2表)。販売の意図は「道者向けの道案内」と「村山修験の富士信仰案内」が考えられる。残存する「禅定図」は、中央に村山の諸堂社と「表惣本寺…」三十四字、上方に富士山湧出縁起、富士山異名、頂上八葉九尊の「富士山略縁起」を記す様式が踏襲されている。道者を奪い合っていた大宮社人は代官に働きかけて「道者は大宮を経由すべし」との制札を出させ、村山三坊は大宮を経由せずに直接村山へ誘致するために「禅定図」を版行したと考えられている<sup>\*12</sup>(第2表)。「道案内」は、時代が下るに従い、村山に至る道筋の情報量が増えていった(第1表)。一方、「富士信仰案内」は、山中の情報量に大きな変化はないが、当時の記録と矛盾する部分が見られる。地誌『駿河記』<sup>\*13</sup>『駿河国新風土記』<sup>\*14</sup>には大棟梁権現、浅間神、大日が相殿一社に祀られているとあるが、「禅定図」では、大棟梁権現社、大日堂、浅間社が描かれている。また、辻之坊は、明暦3年(1657)から安永年間(1772~81)まで「西の屋敷」、安永年間から天保年間(1830~44)まで「東の屋敷」にあったと古文書<sup>\*15</sup>にあるが、現存する「禅定図」の多くは「西の屋敷」であり、管見の限りでは幕末の神戸麗山の「富士山表口真面之図」<sup>\*16</sup>だけが「東の屋敷」を描いている。19世紀前半の富士郡巡村の際に桑原黙斎が描いた『駿河記』<sup>\*17</sup>第25巻「村山浅間社」は、登拝道の西に辻之坊「東の屋敷」を描いている(第2表)。地誌・古文書の記録と「禅定図」の信仰施設の記載には矛盾があり再検討の必要がある。「禅定図」は、村山を含む山中のあるべき「富士信仰の世界」を様式化して描いたとは考えられないだろうか。

### 『明細記』『風土記』の原著者が参考にした富士山禅定図について

『明細記』の原著者は駿府訪問時に買い求めた「禅定図」を参考に絵図を作成したと推定される。村山付近にあった「表惣本寺…」三十四字が山体の右肩に移動され、「富士山略縁起」を巻末に残した理由は限られた紙面の有効利用と考えられよう。「表惣本寺…」は、村山三坊が聖護院宮と将軍家を権威づけに利用した文言だが、原著者がどれだけ意識していたかは不明である。参考にした「禅定図」には凡夫川付近に「参詣ノ者コリハ/セウシヤゲ」と東見付付近に「下向ミチ」の記事があったことがわかる。巻末の「富士山略縁

起」には、宝永火口付近にあった記事「宝永四丁亥十一月廿三日ヤケ出十二月八日消る砂石東國ノ方数十丈フル」が紛れ込んでいる。『風土記』の原著者は、『明細記』が参考にしたよりも新しい「禪定図」を用いて既に指摘したような訂正・修正を加えたと考えられる。両書ともに「中禪定道」「発心門」の位置が誤っており登拝体験はなかったと考えられる。また「山宮辻坊」の誤りを正したが、「大鏡坊」は加えていない。「大鏡坊」は、村山三坊の一坊で、大棟梁権現社を管理した。文明10年(1478)制作の大日堂木造金剛界大日如来坐像の胎内銘<sup>\*18</sup>に寺務「大鏡坊」とあり、万延元年(1860)には英公使オールコックが宿泊したと『袖日記』<sup>\*19</sup>にある。三坊の中で唯一場所を変えず小字「中ノ上」にあった<sup>\*20</sup>。初期の「禪定図」には「大鏡坊」の記載のないものもあるが、両書の原著者が参考にした時代の異なる「禪定図」に記載がない確率は低いと思われる。両書の絵図を観察すると『明細記』には2箇所、『風土記』には1箇所の宿坊名の記されていない屋根が描かれている。『風土記』には鳥居木の右に「辻坊」の記述があり、登拝道の西と鳥居木上方のどちらを「辻坊」とするのか曖昧であるが、「禪定図」では「西の屋敷」を描く様式が定着していたならば、鳥居木上方が「辻坊」であり、登拝道の西は「大鏡坊」となる。「大鏡坊」の文字を記入しなかった理由は不明であるが、書名を改変し、序文・富士山略縁起を意図的に削除した原著者の判断があったと推察される。

\* 『風土記』原著者を探る資料として『風土記』「追加」がある。掲載された24の短歌・俳句の17句は『駿州名勝志』<sup>\*21</sup>に重なることを指摘しておきたい。

第2表 『駿府風土記』と駿河地誌執筆者の関連年表

和暦	西暦	関連事項
宝暦8	1758	『駿府明細記』原著者の駿府滞在(～1759)。「富士山道」の道標設置。
安永年間	1772～81	原著者、再度の駿府滞在。『駿府明細記』成稿。辻之坊移動(東屋敷へ)。
天明6	1786	元吉原の富士見屋、富士山禪定図販売の記事(『東街便覧図略』)。
寛政11	1799	「江川太郎左衛門大宮口制札写」(案主富士氏文書29)大宮経由の徹底。
文化5	1808	6月15日、新庄道雄(『駿河国新風土記』著者)、富士登山。
文化13	1816	桑原黙齋(『駿河記』著者)、富士郡巡村。
文政元	1818	桑原黙齋、富士郡再巡村と『駿河記』脱稿。
		この頃、桑原黙齋記「真木祭大祭」。
文政9	1826	7月9日、新庄道雄、富士再登山。
天保7	1836	6月上旬、当館蔵『駿府風土記』書写。
天保14	1843	阿部正信『駿国雑誌』に「駿府明細記に出る御殿図」掲載。
文久元年	1861	新宮(中村)高平『駿河志料』に「七月十六日神事」の記事。

## まとめ

『明細記』『風土記』の富士山絵図を比較検討し、次のような結論を導いた。『明細記』『風土記』の富士山絵図は村山三坊が版行に係わった時代の異なった「禪定図」を参考に描かれ、『風土記』はより新しい「禪定図」を参考にしたため、『明細記』の修正・訂正が可能であったと考えられる。富士山絵図の画題は「富士山禪定図」であり、当館所蔵の『風土記』の書誌情報も改める必要がある。村山三坊の「禪定図」は地誌や古文書の記録と矛盾する部分があり再検討の必要がある。若尾氏の両書の差異に「富士山略縁起」を追加する必要がある。

## 修験集落の祭り ー資料紹介ー (「村山浅間大日大棟梁祭礼并勤行之次第」参照<sup>\*22</sup>)

「七月十六日神事、一本杉大杉明神天御中主尊祭る、其社へ神輿の渡御ありて修法あり、社前に柱を立つ、其柱の長四丈五尺、其柱へ六尺の木四本、横に二段に藤蔓以て結附、扱其柱へ行者山伏を乗せて柱を押建つるとき、上なる横木に腰をかけ、下なる横木に足を踏、彼柱の木口にて柴燈護摩を執行す、畢れば柱をおしたふす、扱行者と先達と向ひ立ち、扇をひろげ舞かなづ、謡ひものは、浜松の音は、さゝんささゝんさ、國も治る、面白の、浦のけしきかな、と謡なり、此行法は下山伏十二人年番に勤仕す」『駿河志料』(二)<sup>\*23</sup>  
「七月十六日真木祭大祭也」『修訂駿河国新風土記』下<sup>\*24</sup>

\* 「富士山名所記」には村山と大宮の間に杉の巨木が描かれ「一本杵」<sup>\*25</sup>とある。神戸麗山「富士山表口真面之図」では西見付付近に杉の巨木が描かれ「大杉明神」<sup>\*26</sup>とある。祭りとの関係は不明である。

## 註

- \*1 久能文庫所蔵『駿河風土記』は当館ホームページのデジタルライブラリーにてデジタル画像の閲覧が出来る。テキストは、駿河叢書第19編『駿府風土記』（志豆波多会、1934年）の謄写版刷刻、駿河古文書会原典シリーズ7『駿府風土記』（駿河古文書会、1976年）の影印版、『静岡市史中世近世史料2』（静岡市、1981年）877-934ページの翻刻版が刊行されている。
- \*2 若尾俊平『江戸時代の駿府新考』（静岡谷島屋、1983年）177-180ページ。
- \*3 同書、181-194ページ。
- \*4 内閣文庫『駿府明細記』は国立公文書館にて閲覧できる。デジタル写真データによって久能本と比較した。
- \*5 米屋優「富士参詣曼荼羅を読み解く」『図説富士山百科』（新人物往来者、2002年）20-24ページ、大高康正「富士参詣曼荼羅試論」『山岳修験』第34号（日本山岳修験学会、2004号）33-51ページ。
- \*6 桑原藤泰『駿河記』下（臨川書店、1974年）218-219ページ、新庄道雄『修訂駿河国新風土記』下（図書刊行会、1975年）911ページ、新宮高平『駿河志料』二（歴史図書社、1969年）417ページ、遠藤秀男「富士曼荼羅や村山修験」『富士宮市史』上（富士宮市、1971年）525-570ページ、大高康正「富士峯修行考」『山岳修験』第43号（2009号）17-47ページ。
- \*7 『浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡』（静岡県埋蔵文化財調査研究所、2009年）参照。
- \*8 荻野裕子「富士山南口案内絵図」『富士市立博物館報』（1999年）、『富士山登山案内図』（富士吉田市教育委員会、2000年）参照。
- \*9 宮地直一・広野三郎「村山浅間神社」『富士の研究』（古今書院、1929年）820-838ページ、宮家準『修験道組織の研究』（春秋社、1999年）445-472ページ。『村山浅間神社調査報告書』（富士宮市教育委員会、2005年）、『村山浅間神社遺跡』（静岡県埋蔵文化財調査研究所、2009年）参照。
- \*10 『富士山村山口登山道遺跡調査報告書』（富士宮市教育委員会、1993年）、荻野裕子、前掲論文参照。
- \*11 児玉幸多監修『東街便覧図略』（羽衣出版、1994年）208-209ページ。
- \*12 荻野裕子、前掲論文参照。
- \*13 桑原藤泰、前掲書217ページ。
- \*14 新庄道雄、前掲書915ページ。
- \*15 「山内屋敷分配并略譜蝶天保三年」註9前掲書（2005、富士宮市教育委員会）160ページ。
- \*16 註8前掲書（富士吉田市教育委員会、2000年）58-59ページ。
- \*17 『駿河記絵図集成』（羽衣出版、1998年）244-245ページ。
- \*18 註9前掲書（富士宮市教育委員会、2005年）32-33、180ページ。
- \*19 『袖日記』八番・九番（富士宮市教育委員会、2000年）178ページ。
- \*20 「境内分配帳」註9前掲書（富士宮市教育委員会、2005年）143ページ。
- \*21 駿河叢書第25編『駿州名勝志』（志豆波多会、1935年）参照。
- \*22 註9前掲書（富士宮市教育委員会、2005年）250-252ページ。
- \*23 新宮高平、前掲書416-417ページ。
- \*24 桑原藤泰記、『修訂駿河国新風土記』下）続編三富士郡三、1328ページ。
- \*25 註8前掲書（富士吉田市教育委員会、2000年）20-21ページ。
- \*26 註8前掲書（富士吉田市教育委員会、2000年）58-59ページ。

デジタルライブラリー『駿府風土記』へのリンクは[こちら](#)